

東低の冬型だった。明日は大丈夫だろう。夕食後、明日の行動の打合せをする。明日下山しようという意見。ウソッコ小屋までという意見。機会の少ない冬山なので陽が昇ってから行き、8ミリを回したいという意見。いろいろ出たが結局明日横窪小屋に着いて決定することにした。

僕はCLなので決定はするが、その前に意見は聞いておきたい。起床1時、出発4時と決め早めにシュラフに入る。小屋の西側は入口から奥まで僕達が占領し杜観だった。夜中トイレに出ると満天の星だった。ヒューンと風が渡る。「今日は元旦だったな」何か忘れ物をした様な気がした。

1月2日(晴)
へタイム 起床1:00 出発4:
20 上河内岳7:40 茶臼岳9:
50 横窪小屋12:40 (泊) 1 畑雑
ダム 長泉21:00
昨夜に比較すると暖かい夜だった。今朝のメニューはレトルトライスにカレー。お湯を沸かし御飯を温める。その時、2階から「うるせえーぞ、お前ら三島労働山だろ」と怒鳴る声がある。少し前より文句をいっていたらしいが聞こ

えなかった。昨年も甲斐駒の六合目石室でも怒鳴られた。我会はいつも朝早いのでこうしたトラブルはある。大体連中は遅寝遅起きなのだ。「すいません」と言っただけで通りに支度を済ませた。

出発の準備をするが竹端のアイゼンバンドが短かくて苦労する。彼のアイゼンはちょっと昔の「ヒッカケ式」なのでバンドが短かいと回らない。僕も手伝って何とか回した。全員揃い出発の瞬間の短い緊張。そして少しの不安。それをほぐす軽い打合せ。今日は初心者もいる足の揃っていないパーティーなので気を配る様注意する。月の光が煌々とする樹林帯を登り上河内岳めざす。トッパは山口、次に坂牧、栗城と続く。森林限界で小川と栗城がアンザイルン。もしもに備えてのことだ。聖岳の巨体が迫る。アイゼンのうつろな響き。この辺りで川口のアイゼンがまた外れる。杉澤が付添う。スリルのある魅力的な細い雪稜をたどると頂上に達した。杉澤と川口がまだ来ないので僕と大橋が迎えに行く。川口のアイゼンは結局駄目でノーアイゼンで来た。

11名揃って茶臼岳めざす。もう何も心配はなかった。夏はお花畑

になる所で大休止して茶臼岳隊を呼び出す。すぐ今井が元気な声で「明けましておめでとう」と言った。全員元気とのこと。明るい海野の声、はしゃぐ榊原の声も聞こえる。茶臼岳コルで14名全員が合流、感激的な瞬間だった。こんな上手にドッキング出来ると誰が予想したか。皆茶臼岳に向かい僕は茶臼小屋に向かい荷上げ品を回収して待たされたが、仲々降りてこないでキスリングに一斗缶を乗せて1人で横窪小屋に向かう。

小屋で待っていると30分位して大橋が1人で降りてきた。陽当たりの良い所で寝ていると13時に皆は下ってきた。毛利より栗城が途中登山道より落ちたと報告があった。ちょっと疲れたのであろう。小屋に入り今後のことを協議する。重苦しい雰囲気になる。

僕と大橋、川口は今日下りたいと表明する。山口はそれに強く反対した。CLの僕が下山するのは反道義的という。結局、CLは以後毛利が務め、3人は下山を決定した。意外と早くダムに到着し、山口のカローラで三島に向かう。途中31日に交信した入谷さんと再交信。「是非寄ってください」との言葉を辞し車を飛ばした。

1月3日(晴)
へタイム 起床4:00 出発6:
30 畑雑ダム10:15 三島

下山道は悪かったが全員無事夕ム着。毛利、海野、佐野は聖沢の車を回収。残りはゲートが閉じているので支柱の横に車道を作った。道具がなくこの作業は困難だったが、良い指導者がいてうまくいった。車も回収されゲートも無事通過してダムサイトで記念撮影後、三島に向かった。

(文中敬称略)
(81年8月発行機関誌「くろり」第7号に収録)

解説

三島労働山始まって以来の大規模な冬山合宿だった。どんな山行でもそうだが、会の初、中、上級者が一同に介せる山行が一番望ましい。行動を共にしてこそ人材は育つのである。その意味で、日程に若干の差はあったものの、これだけの山行を実践できたのは、当時は第1次隆盛期で最も充実した時期であり、女性の活躍も目立った。しかし、翌年「みちくさハイキングクラブ」が分離独立し、三島労働山は一時的に衰退していった。